

問われる市のバリアフリー観

やはり名古屋のことが気になるので、図書館で中日新聞の地域欄などを定期的にチェックしている。気になる記事は多いが、やはり名古屋市政を揺り動かす名古屋城問題に注目する。写真は数年前に撮った名古屋城。いま天守閣の木造化と石垣をめぐる攻防が続いている。いつまで経っても「尾張名古屋は城でもつ」だと考えたりもするが、名古屋市、とりわけ河村たかし市長の姿勢により、市政も混乱しているようだ。



そんな中で、朝日新聞大阪本社版9月13日に掲載された標題の「記者有論」に注目した。名古屋城エレベーター問題



は、名古屋市だけでなく、全国ネットの問題なのだ。身体障害者のヘルパーをしていた北上田剛さんの「記者有論」は説得力があり、多くの人に読んでもらいたい。

名古屋城の天守を木造復元する計画を巡り、新たな天守にはエレベーターを付けないとする名古屋市の決定に障害者団体が反発している。

現在のコンクリート製の天守（最上部は7階）には、内部に5階まで上がれるエレベーターが2基、外部に1基ある。だが、「史実に忠実な復元」を掲げる河村たかし市長は、新たな木造天守には設置しないと表明。内部に付ければ梁や柱を切断する必要があり、外部では外観を損なうというのが主な理由だ。

これに対し、愛知県内の複数の障害者団体が「障害者差別解消法やバリアフリー法に反する」と設置を要求。全国から集まった約600人がデモ行進したり、車いすの代表者が市役所前でハンガーストライキをしたりするなど抗議活動が続く。

河村市長はエレベーターの代わりに、ドローンや移動補助ロボットなど「新技術」を使った複数の案を示した。だが、これが両者の溝をさらに深めた。安全性や実現可能性の問題だけでなく、「ドローンで運ぶなんて、私たちが荷物だと思っているのか」と批判が広まった。

15年ほど前、私は身体障害者のヘルパーをしていた。公共施設のバリアフリー化を訴えるため、役所に足を運ぶ電動車いすの人に付き添った。目的地までの道に階段しかなく、たびたび来た道を引き返したことを思い出す。

当時と比べても、街のバリアフリーは大きく進んだ。全国の障害者らが地道に声を上げ続けた結果だろう。「私たちは階段を前に何度も絶望してきた。今の時代に、行政にこんな抗議活動をしないとイケないのが悲しい」。取材した車いすの男性が憤るのも、

もっともだと思える。

河村市長と障害者団体はこれまで、何度も直接話し合う機会をもってきた。しかし、河村市長は「究極の木造建築物を感じてもらうのがバリアフリーじゃないの?」「僕だったら(上がるのは)あきらめます」と突き放す。ネット上には「障害者のわがままだ」といった声もあり、「名古屋城の問題で、差別や偏見が助長された」と話す障害者もいる。

河村市長には、障害者団体と誠実に向き合い、ともに解決策を探してほしい。確かに、エレベーターを設置すると「史実に忠実」ではなくなるだろう。しかし、そうした行政の姿勢から、「将来、遠足で訪れた車いすの子どもが、1人だけ一緒に上がれなかったらどんな気持ちになるのか」という切実な訴えに答える言葉が見つかるだろうか。

エレベーターがあれば、高齢者やベビーカーの子育て世代も安心して利用できるだろう。なるべく外観を損ねないよう配慮した形でのエレベーター設置など、議論の余地はまだあるのではないか。行政としてのバリアフリー観が問われている。

(2018年9月28日)